『内側から見たテレビ』　2014年12月03日

水島宏明氏の『内側から見たテレビ』を読んで、そうだろうと納得した。水島氏は札幌テレビドキュメンタリー制作に関わり、ヨーロッパの特派員を歴任後、日本テレビに入り、ドキュメンタリー番組を多数、作った人である。「ネットカフェ難民」という言葉の名づけ親である。現在は、法政大学社会学部教授に転職している。テレビと深く関わった経験をふまえ、視聴者にテレビの読み取り方、情報の取捨選択に役立ててもらいたいと著したと言う。

テレビ番組は色んな職種の人々が熱気をもって作っている、いわば「総合芸術」と言えよう。「帯」には「なぜ嘘をつくのか？ 何を煽っているのか？ 腐敗した現場に迫る元キー局報道記者が見た劣化するＴＶマン」とネガティブな言葉が並んでいる。テレビ会社に就職する人は「勝ち組」の人で「上から目線」を持ち、困難を強いられている人々の立場を理解できない。痛みを持つ人々をさらに傷つけるような報道をし、無神経なドラマを作っている。視聴率至上主義が、嘘とやらせの捏造を作り上げる。またＴＶマンたちは現場に行かず、時間とお金を惜しみ、パソコンの前で作っている。安直に、お涙ちょうだい的にドラマティックに仕上げる。誰もが知っている報道記事から、その事情と背景を解説している。大宅壮一氏が「テレビによって、一億総白痴化する」と言った言葉を思い出す。

テレビ報道を見る人に真偽を見分けるアドバイスを書いている。① 主人公を美化するばかりで批判的な視点がない。② 安手の再現ドラマが登場する。③ 美談や昔の苦労話ばかりである。④ おどろおどろしい音楽やいかにも感情を盛り上げようとする音楽がかかる。⑤ ナレーションが多く、見ている人に考える余裕を与えない。⑥ 「愛」「絆」「真実」などの美辞麗句を連発する。⑦ ナレーションで「驚くべきものだった!」「この人から目が離せない!」などの言葉で盛り上げる。⑧ 大きく派手な色付きのスーパーが出る。⑨ 背景にある社会問題が伝えられない。なるほどと思う。私は ⑨ が大事だと思う。死刑になりたくて、凶暴な犯罪に走る人がいる。社会では生きられないから、罪を犯して刑務所に入りたいという人もいる。それらの背景をしっかり検証しなければ、報道の意味がない。ジャーナリズムは弱者の側に立つもので、表に現われた情報だけを追いかけ、責めるだけではなく、背後にある社会問題の深い掘り下げが何より必要である。

また、ジャーナリズムは権力を監視する役目を担っている。信用できる政治報道の見極め方を書いている。① 政権に対して、距離を置いて冷静に批判的に見ているか。② 権力者が番組に登場したこと自体を喜んでいないか。③ わけ知り顔のテレビ局の政治部長や解説委員長などが登場して、質問者やコメンテーターになっていないか。④ 首相などの権力者がスタジオに来たときに相手が一番嫌がる質問を投げかけているか。⑤ 政治家のインタビューが生放送でなく、ＶＴＲ収録でないか。五つの見極め方から見れば、ほとんどが信用できないのではないか。最近の政治報道では批判的な人はテレビに登場しない。登場させないように、政府に「忖度して」選択しているのが事実であろう。

インターネットの普及でテレビ離れがあると言うが、テレビの影響力は大きい。劣化したテレビに対し、水島氏は希望を書いている。地方局が地元の問題を根気強く取材する中で、国の政策の歪んだ構図が浮かび上がって見えてくる。また、ＴＶで働く人々が想像力や感受性を広げ、問題意識を深化させることであると言う。これは、大手新聞は腰が引け、地方新聞が頑張っていることからも首肯できる。